

東海大学通信工学同窓会(TASC) タイ支部会 特別講演

The First Pioneer at Tokai University

(Feb 13, 2015 at KMITL)

プラキット タンティーンサーノン
(Dr Prakit Tangtisanon)

TASC タイ支部長(元 KMITL 学長)

こんにちは皆さん、私の話の後にキャンパス見学をいたします、あまり時間が無いので簡単に話したいと思います。

私たち4人(注1)は1965年11月3日に日本に着きました。来日時日本語は出来ませんでした、しばらく東京に居てから東海大湘南校舎で日本語を学びました。専門校(ノンタブリ電気通信大学(注2))を卒業したのは3月でしたがOTCA(JICA国際協力機構の前身)がいろいろな大学へ受け入れを頼みに行きましたがどの大学も受けてくれなかったのです。私たちは日本語が出来ませんが専門学校を終了していますので3年生に編入するのが希望でした。結局、荒木光弥さんの著書(注3)に書かれているように松前重義総長が何処も引き受けがなければと東海大が受け入れてくれたのです。このようにして東海大へ来ました。先ず湘南校舎で11月から2月末まで正味3か月間日本語勉強した後1966年(昭和41年)4月に東海大学通信工学科3年生に編入しました。当時の工学部長は谷村功先生、面接でいろいろ聞かれましたがあまりうまく答えられませんでした。同級生には若林敏雄先生がいます。とにかく日本語があまり理解できなかったのが大変でした。特に日本語教科書は理解するのに大変でした。唯一寺本先生だけが英語の電気回りの教科書で解りましたが、それでも黒板に書く内容は全然理解出来ないのが漢字をそのまま写しました。講義終わって同級生に読み方と意味を聞いて理解に務めました「これは何と読むか?意味は?」とか、本当に大変でした。日本語には音読み訓読みなどいくつかの読み方があります、今はコンピュータで便利になりましたが当時は当用漢字に当てはめて辞書を引きます、日本語が解らない場合英訳します、更に解らないときは英語からタイ語に直して勉強しました。日本語を理解するのは大変でしたが先生方と級友が親切で卒業できました。当時を振り返る思い出話としては、最初は日本の習慣が解りません、なんでも詳しい、教えるのも詳しく教える、また優しく親切でたくさんの友達が出来きました。同級生は2つのタイプがあり、遊ぶ人、まじめな人、覚えている事として厚い英語辞書を2・3回位めくるだけで見つける友人がいました。日本人で勉強する人はすごくするが勉強しない人はしない、勉強する人と友達になったほうが深く勉強できるので沢山の友達を作りました。復習は一週間分しました、宿題があれば翌週提出しなければならぬので宿題の意味がわからない場合のためになるべく早く事前に復習しました。3年の時の試験は英語で答えましたが質問が解らないときは先生を呼んで問題の意味を聞いて答を書きました、試験も大変でした。しかし4年になったら日本語が解るようになり試験問題を聞くようなことは無くなりました。湘南の望星学塾寮の話です、お風呂を初めて見たとき皆が裸恥ずかしいので部屋に戻り4人で相談して次の日から4時頃一番風呂に入り他の寮生が入る前に済ませるようにしました。もう一つの話ですが、未だ日本語が解らないとき4人で新宿に遊びに行き帰りの小田急に私だけ真ん中くらいの車両に乗り眠ってしまいました目が覚めると一番前で、藤沢駅、駅員に聞き最終の電車に乗って戻りましたが駅から真っ暗な道を寮まで歩くのがすごく怖かったことは忘れられません。

卒業後タイに戻りノンタブリの先生になりました、当時ノンタブリは先生がほとんどいな

い状況でしたので私たちが帰国後即教えました。当時は専門学校でしたが3年後ラカバンに移りモンクット王工科大学ラカバン（注4）となりました。ラカバンでの第一期生卒業時に普通は卒業論文が卒業審査ですが私たちは日本で実験を沢山やってきましたのでラカバンでも実技実験を重視し卒論は論文でなく「もの作り」（注5）を義務付けました、つまり卒業したければ何かものを作らなければならない、何を作るか考えて物を作る。第一回目の卒業制作の展示会をラカバンで開催しました、プーミポン国王陛下はじめ沢山の人が来てくれました、ラカバンでこんなことが出来るのかと多くの見学者から驚きの声が聞かれました。そして一週間で終わらず2日延長し、午後2時から夜の8時頃まで開催しました。松前重義総長にもお越しいただき夜の8時までご一緒していただきました。その結果、入学希望者が増え、また入学試験の難易度も急に上りました。2回目、3回目となるとラカバンの展示会には多くの人が集まるようになり企業からも注目されるようになりました。タイの就職は4年生を卒業後に行います。就職面接に於いてラカバンの学生は「工場が何処か」、「製品について」、「自分のやりたい事」を話します。他の大学の学生は「事務所はどこにあるか」、「冷房は入っていますか」など条件を聞きますがラカバンの学生はそのような条件の事を言いません。本当に自分がやりたい仕事についての話をします。したがって企業がラカバンに来て欲しい卒業生を採用していきます、就職に於いてラカバン卒業生はすごい人気となっています。

今まで話しました様にこれまででやってきました。今後も東海大一期生としてラカバンが更なる発展するように支援し続けたいと思います。

ラカバンはJICAと東海大のおかげで大人になりました。もしあの時東海大がなければ今日の姿はありません。何故なら3年に編入できた事が最大の理由です専門学校を出た私たちにとってまた一年生に戻るような大学では絶対に行かなかったと思います。私たち東海大一期生に続いて、アピナン先生（注6）たち後輩もみんな東海出身でラカバン（KM I T L）を立ち上げました。しかし当時学部卒業生だけでは教授陣が薄いと松前重義総長先生に援助をお願いしました。そこで東海大とKM I T Lで協定（注7）を結んでいただきました、内容は、東海大の先生はラカバンに来て教える、ラカバンの先生は東海大へ研究に行く、このように先生方の交流沢山実施し教授陣を厚くしました。

私が学長の時、学生の交流を始めました、私のアイデアで東海大からの学生には、ラカバンが支援してきたスポンサーを集めて貧しい地域の学校や図書館を設置するような作業を日本の学生と一緒にやります、日本には図書館は何処にでもありますタイの田舎にはありません、本を読みたくても読めない地域があります、東海大の学生がそのようタイを現実に経験して学ぶのです。このようにタイの実情を学んだ学生が将来タイで働く場合、容易にタイの社会に入ることが出来ます。実際タイで就職して結婚したケースもあります。私はこの体験学習は必ず成功すると思います。

最後になりますが、今更私ごとですが、荒木光弥さんの著書を読んで日本政府がなぜこのような援助を私たちにしてくれたのかが良く理解できました、ぜひ皆さんにも読んで欲しい

いと思います。あるとき J I C A の方がラオス大学工学部学部長を連れてきてラオス大学をラカバンのようにしたいと来られました。ラオスではほとんどの先生は専門学校出で、ロシア、中国、ベトナムで学んだ方もいますが教えることが出来ないと言われました。それで、私はラカバンが責任をもってやりましょうと答えました。東海大がラカバンにしてくれた様にラカバンがラオス大学に技術援助（注8）をします。その時ラオス大学の学部長が何故このような援助してくれるのか聞かれたので、私はお金ももらっていない、日本がタイにしてくれた事をやります、私たちは大人になったので日本に恩返しをしたいと答えました。このような恩返しはまだ少しですが、将来もっともっと恩返しをしたいです。今後もラカバンは東海大と手をつないで日本とタイの学術親交を更に深めたいと思います。

(注)

1. プラキット先生その他、タウイン・ギントン先生（逝去）、ナロン・ヘマコン先生、マヌーン・ソッカセン先生の4名が1968年に東海大通信工学科を卒業
2. 1961年バンコック北に隣接するノンタブリ市にノンタブリ電気通信訓練センター開校、1964年に短期大学（3年制）に昇格
3. ジャーナリスト 荒木光弥氏の著書、「一つの国際協力物語」松前重義総長が霞ヶ関で JICA 牧野康夫氏からの依頼を受諾する様子などモンクット王工科大の今日までが東海大の支援を含め詳しく書かれている。（タイ語翻訳版も発行されている）
4. バンコック東約30kmのラカバンにキャンパスを移し1971年国立モンクット王工科大学に昇格、校名のモンクット王は1851-61年間在位、「王様と私」のモデル。大学の正式名は King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang(KMITL)
5. 学生が日常生活に使用される機器の発明品の展示、ロボット、インキュベーター、ラジオ、TV、受信装置など。オープンキャンパスで公開、第一回目は1976年開催
6. 二期生として、アピナン・マンヤノン先生、ソンボン・ゴラサウット先生、パンロップ・ラオチャローン先生、プラディット・ワシャラブビン先生の4人が1970年に通信工学科卒業
7. 1977年東海大とKMITLは学術交流協定を結んだ。
8. 2003年、JICA、ラオス国立大、モンクット王工科大の3者でラオス国立大共同プロジェクト開始、東海大学からもJICA専門家として多くの先生方を派遣している

感想

プラキット先生は日本語を学んだのは50年も前の事だから忘れましてと言いながら一語一語をかみしめながらすべて日本語で講演されました。

まず強く感じた点は、**First Pioneer**としての使命感を持って東海大で学ばれたことつまり「タイ人による自立した教育の目標」、この強い使命感こそが日本語のハンデイを克服させた原動力であったと強く感じました。教室での勉強、寮での復習、全てが日本語の環境の下で「日泰」「日英」「英泰」3つの辞書との奮闘の日々の様子が目に浮かびました。この困難な環境下で2年半に及ぶ寮での共同生活に於いてどのようにして4人の仲を保った秘訣を聞いたところ毎晩勉強の後4人でトランプをしてストレスを解消したそうです、また当初戸惑った共同風呂にも慣れ銭湯がリラックスする楽しみにもなったとの事でした。卒業研究の「もの作り」を一般に公開するアイデアはまさしくKMITLを企業、社会にアピールする学園経営ビジネス的戦略と受け止めその実践性に敬意を感じました。現在のKMITLは施設、設備共も大変充実しており東海大の先生方も研究に来られるケースや、またNTTやKDDIからの学生も卒業した実績、更にJICA、ラオス大、KMITLの学術プロジェクトの実績からプラキット先生の言う大人になったラカバンを真に実感しました。

最後に同窓会活動の観点からですが、将来KMITLを起点としてラオスや他のアセアン諸国との東海大の「絆」が広がる姿を思い描かせる印象に残る素晴らしい内容の講演でした。ご講演いただいたプラキット先生、ご参加いただいたPioneerのマヌーン先生、ナロン先生、アピナン先生、東海大同窓会タイ支部長ウィスット先生の皆様及び本企画にご尽力を賜ったピタック先生に深く感謝申し上げます。

以上

2015年3月18日

東海大学通信工学同窓会会長

中西 孝夫